第２部　めざすべき都市像

Ⅰ　めざすべき都市像

Ⅰ　めざすべき都市像

基本的な考え方

ひと･水･緑 ― 住み続けたいまち　多摩区

「都市の骨格を形成する基盤整備」と
「生活圏を単位とした身近なまちづくり」とのバランスが取れたまちをめざす

1　市民生活に必要な都市の骨格を形成する基盤整備をめざします

2　身近な生活圏における市民の暮らしの視点に立ったまちを育みます

3　バランスの取れたまちづくりの実現をめざします

＜都市像の背景・視点＞

①都市開発が進む時代を経て

・多摩区のまちは、多摩丘陵と多摩川の豊かな水と緑の環境の中で育まれてきました。人々は、二ヶ領用水を開削し、田畑をひらき、土を耕し、水を大切にして暮らしてきました。鉄道が引かれ、多摩川に橋がかかり、津久井道や府中街道が整備される中で、丘陵地が開発され、緑地や田畑が住宅地へと変ぼうしました。

・昭和 40 年～50 年代には、丘陵地の宅地開発が進むとともに、多くの平たん地においては、道路等の都市基盤が整備されないまま、農地の宅地化が進みました。現在では、里山の緑や街なかの農地は減少し、緑を奪われ保水力を失った丘陵地から流れ出る雨水を受ける河川は深いコンクリートの溝に変わってしまいました。

②市民の暮らしの視点に立ったまちづくりへ

・少子高齢社会の到来や、社会経済情勢の変化により、行政主導の成長拡大型のまちづくりを見直し、市民の暮らしの視点に立ったまちづくりが求められています。

・多くの住宅地は、少子高齢化が進み、多世代がバランス良く住めるまちへの更新が求められています。さらに、少子高齢社会に対応した新しいコミュニティサービスの提供が求められています。「身の丈にあった」、「身近な生活圏」、「暮らしの視点」、「自然環境を活かした」、「住みやすいまち」、あるいは、ほころびを繕っていくような「まちづくろい」という言葉に象徴されるように、地域の人々の目は身近な地域の課題の解決に向いています。

③子どもたちへ引き継げる持続可能なまちづくりを

・「自然」、「環境」、「共生」という言葉に代表されるように、環境的にも、経済的にも、社会的にも持続可能なまちづくりとは、自分のこと、自分の周囲のことだけでなく、地域や多摩区全体、もっと広げて地球規模に至るまで、自然や環境に気を配り、昔から受け継いできた大切な資産を将来につなげていくことです。次世代の子どもたちへ、何を残すか、何を引き継ぐかを考えていくことが求められています。

・多摩区は、交通の利便性が高く、徒歩圏、自転車圏で区内がほぼカバーされているまちです。鉄道駅やバスの拠点を核とした「生活圏」を中心に、まちのにぎわいを取り戻し、地域への愛着を育てることにより、生活者中心の住み続けられるまちをめざします。都市の骨格となる都市基盤の整備と身近な生活圏のまちづくり相互のバランスを取りながら、市民と行政との協働のまちづくりへ方向転換していくことが求められています。

ひと･水･緑 ― 住み続けたいまち　多摩区

・多摩区のまちの骨格を形成する多摩丘陵の多摩川崖線の斜面緑地と、その核となる生田緑地などの「緑」、多摩川とその支川の「水辺」、そこに暮らす「人」が調和し、地域環境の質、市民生活の質を向上させる、住み続けたいと思えるまちをめざします。

都市の骨格を形成する基盤の整備

＊対象事業の絞り込み
＊行政主導・市民参画

生活圏を単位にした身近なまちづくり

＊地域課題の掘り起こし
＊市民・行政の協働

バランスの取れたまちづくり

水・緑・住環境

骨格となる水と緑
＊多摩川崖線の斜面緑地
＊生田緑地
＊多摩川

まちづくろい（資源活用）
＊農地・水辺・住まい
＊暮らしの視点
＊時間軸・歴史資産の活用

交通ネットワーク

幹線道路整備
＊世田谷町田線等
鉄道整備
＊踏切の解消

生活道路整備
＊歩きやすい道、歩きたくなる道
＊鉄道を中心とした交通

都市拠点

地域生活拠点
＊基盤整備（区画整理）
＊都市機能の拡充
＊まちの活性化

生活拠点
＊地域に応じた整備手法
＊生活圏のまちづくり

1　市民生活に必要な都市の骨格を形成する基盤整備をめざします

・本市の「地域生活拠点」として、多摩区の区心として、登戸・向ヶ丘遊園駅周辺地区において、土地区画整理事業を推進することにより、拠点としての新たな都市機能の集積を促進し、まちの活性化をめざします。
・市民生活や都市活動を支える幹線道路網の整備を進め、鉄道網の整備を促進します。
・多摩区の都市の骨格を形成する、多摩丘陵の斜面緑地の保全と生田緑地の整備、多摩川とその支川の水辺環境の保全と活用を図り、市民と共に、水と緑の骨格軸を守り育みます。
・これら、骨格的な都市基盤の整備にあたっては、メリハリのある効率的・効果的な投資による基盤形成や、市民や事業者との協働による地域の様々な資源を活かした魅力ある街なみづくりをめざします。

2　身近な生活圏における市民の暮らしの視点に立ったまちを育みます

・区内に残された農地や河川、水路沿いの水辺空間、さらに、これら自然環境と調和した住宅地は、市民の暮らしの視点に立って、また、多摩区の歴史の移り変わりといった時間軸の視点に立って、貴重な資源や財産を次世代に受け継いでいくまちづくりを市民と共に進めます。
・歩きやすい道、歩きたくなる道をめざした身近な生活道路の整備や、自動車交通に過度に依存しない公共交通網の整備等、市民生活に欠かせない地域交通環境の整備に努めます。
・鉄道駅を中心に営まれる市民生活の視点に立って、鉄道駅を中心とした生活拠点の育成や身近な生活圏ごとのまちづくりを市民と協働して取り組みます。
・これらの整備にあたっては、これまでの成長拡大型から修復型へ、また、行政主導型から市民協働型に転換し、今ある資源を活かし、まちを繕っていくという「まちづくろい」といった考え方により、身近な生活圏における暮らしの視点に立ったまちを市民と共に育みます。

3　バランスの取れたまちづくりの実現をめざします

・持続可能なまちをめざして、自分や自分たち周辺のことはもちろん、多摩区全体のことにも気を配り、昔から受け継いできたまちの資源や財産を、次の世代に受け継いでいく視点が欠かせません。骨格的な都市基盤整備と市民の暮らしの視点に立った生活圏のまちづくりのバランスを取りながら、市民協働による持続可能なまちづくりをめざします。